

飛び出せ 学校

この新聞は、臼杵市福良ヶ丘小学校の5年生（当時、西嶋沙樹教諭＝19人）が、大分合同新聞の記者と一緒に作りました。

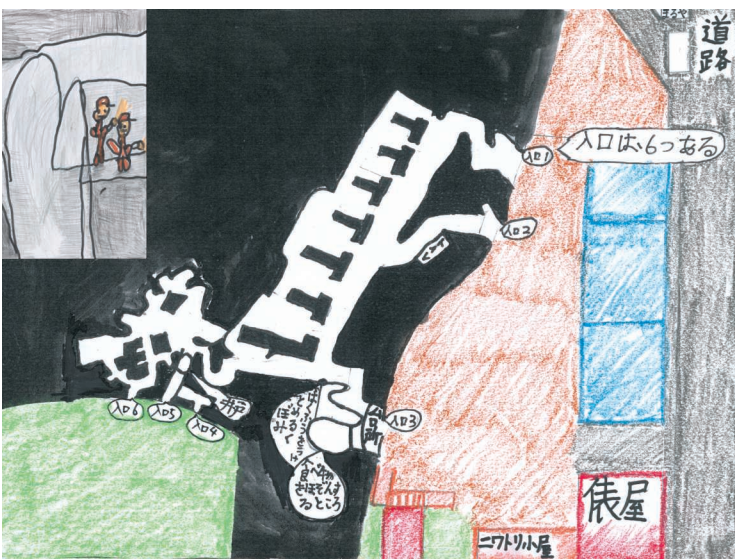
大分合同小学生新聞

発行者
臼杵市
福良ヶ丘小学校
5年生

白杵から平和をつなぐ



わたしたちが通う臼杵市福良ヶ丘小学校には、「福太郎」というクスノキがあります。そのクスノキは、長崎に原子爆弾が落とされたときに被爆したクスノキの2世だったのです。そのことから、わたしたちは地域に残る防空壕や空襲のことを学習しました。わたしたちが知ったことをみなさんに伝えて、もっと平和な世の中にしていきたいです。一生懸命作ったのでぜひ読んでください。



臼杵市福良ヶ丘小学校の下には、大きな防空壕があることを知っています。この防空壕は、太平洋戦争中の1943（昭和18）年に作られました。当時は臼杵市でも空襲があり、懐中電灯をみんなで消してみる



「私たちは、防空壕を管理している斎藤行雄さん(61)に案内してもらい、実際に防空壕の中に入りました。まず、入り口の近くには台所があり、上にはけむりを出す穴もありました。そして、その後ろ側には、食材を保存する部屋もありました。少し進んだところにトイレもありました。最初は、おふろかな？と思ったけれど、トイレでした。奥に入ると、六つの部屋とその間に奥には、約160人が入れるというホールがありました。かべにはくぎがささっており、そこにはかばんや服、ランタンなどをかけていたそうです。工夫されていることにびっくりしました。

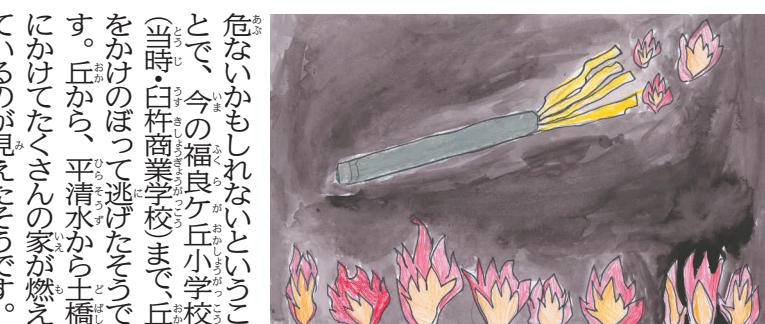


斎藤行雄さん

生活を送っていました。防空壕には、多くの人が入り口が6か所あり、爆風を受け止める行き止まりが作られており、命を守る工夫もされていました。

土橋空襲が残した恐怖

太平洋戦争中、臼杵市にも空襲がありました。焼夷弾が落とされた場所が、土橋付近だったので、土橋空襲と言われています。体験した木許哲郎さんの話をもとにした紙芝居で学習しました。



空襲があったのは、夜中の2時ごろで、夜空を見上げる星がかがやいているように見えたそうです。それは、焼夷弾だったのです。亡くなった人はさいわいいませんでしたが、約25軒の家が燃えたそうです。木許さんは防空壕に逃げ込みましたが、ここは

危険かもしれないというので、今の福良ヶ丘小学校（当時、臼杵商業学校）まで丘をかけたぼつて逃げたそうです。丘から、清水から土橋にかけてたくさんのお家が燃えているのが見えたそうです。また、当時の小中学生は、戦争が激しくなると勉強はできず、戦争の訓練をさせられたり働かされたりしたそうです。野津町よりさらに遠い三重町まで、夜中から走らされた訓練もあったそうです。おなかですいてるの、途中で足がふらふらとなつて動け

私たちが作りました



え、けんかをするだけのこと、けんかしてもすぐやめること、いじめや差別をなくすこと。戦争は、意見がぶつちつて起こってしまうと思うので、人の意見を尊重していくことを心がけていきたいです。

私たちは、福太郎が福良ヶ丘小学校に来てくれたこと、先輩たちが育ててくれた大き成長しているのをうれしく思います。それと同時に、戦争があったことを思い出し、悲しさがまじってなんともいえない気持ちになります。たくさんの方の願いが込められている福太郎は「もう戦争はしない」と言っているように、気がしますが、戦争はしなかったら、だめというのを世界中に伝えるのが福良ヶ丘小学校にできる使命だと思います。

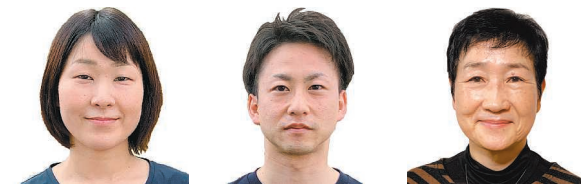


⑤臼杵支局の衣笠由布紀記者から取材のノウハウなどを学ぶ（2021年6月8日）⑥防空壕を見学する児童ら（6月21日）⑦新聞を広げて記事を探し、新聞の特徴を学習（10月15日）

の話を聞き、取材する技術も身に付けた。当時の担任の西嶋沙樹教諭(42)は「興味を持って取材し、今後は自分たちが伝える側になりたい」との思いを強めてくれた」と喜んだ。

大分合同新聞社臼杵支局の衣笠由布紀記者(34)が取材の仕方をアドバイス。見出しの付け方やレイアウトの基本は同ニュース編集部（当時）の平尾将俊記者(36)が指導した。

この企画は小学生（主に5、6年生）が、地域の魅力や課題を取材し、新聞にまとめる作業を通して古里を見詰め直すことを目的としています。問い合わせは大分合同新聞社地域連携室「飛び出せ学校」係へ。☎097・538・9729、Eメールnie@oita.press.co.jp



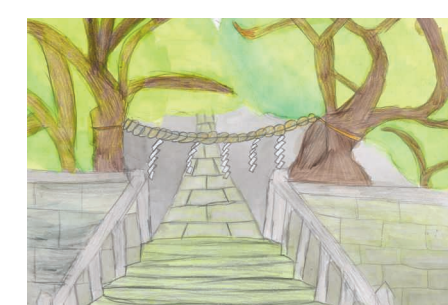
矢田景子さん 河野大地さん 内藤多賀子さん

福良ヶ丘小学校には、長崎の山王神社の被爆クスノキの子ども「福太郎」が植えられています。福太郎が、私たちの学校にやってきましたのは、今から21年前の2001年7月です。私たちは、当時1つだった内藤多賀子先生(66)にお話を聞き

ました。はじめは高さ1メートルの幼木で、小学校全員の校門前の花壇に植えられました。河野さんは、児童会で水やりをしていたことを覚えているそうです。「久しぶりに見てどうですか」と質問すると、河野さんは「今までの学生さんと先生方が育ててくれ、ここまで大きくなったことがうれし

被爆クスノキ2世「福太郎」

山王神社のクスノキは、樹齢600年の大木で、その幹回りの大きさは、子ども7人が手をつないだほどです。被爆当時は、熱線で半分は焼かれ、ガラスや石が幹の中に食い込み、一時は枯れ木同然でしたが、木の



私たちは、自分の学校にクスノキがあることを知っていたけれど、そのクスノキが被爆クスノキだったことを聞いてびっくりしました。また、自分たちの地域にこんなに大きな防空壕があったことや空襲が起きていたこともあまり知りませんでした。当時の人々は、いつも爆弾が落ちてきて恐怖でいっぱいだったのではないかと思います。それと同時に人の命を守りたいという思いも強く伝わってきました。



命であると思ひます。



臼杵市福良ヶ丘小

歴史への理解深める

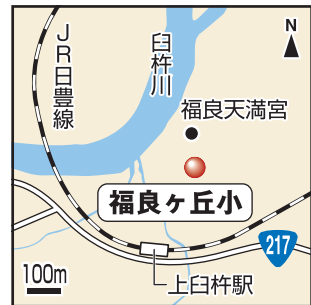
新聞ができるまで

歴史深い城下町や臼杵川を望む高台に位置する臼杵市福良の福良ヶ丘小学校。「地域の戦争遺跡について発信することで、平和を伝えていきたい」と新聞作りに乗り出した5年生＝当時＝19人は、取材を通して地域の歴史に関する知識を深めた。

2021年5月、同校に植えられている山王神社（長崎県）の被爆クスノキの子ども「福太郎」について、内藤多賀子さん(66)にインタビュー。被爆当時のクスノキの状態や、福太郎が同校に植えられるまでの経緯などを学んだ。

同6月には、市内の福良天満宮の下にある防空壕を訪れた。管理者の斎藤行雄さん(61)に案内してもらい、隅々まで見学。命を守る工夫や生活しやすい設計がなされていることを理解した。

市内での空襲体験を基に作られた紙芝居で「空襲が残した恐怖」につ



新聞づくりの様子をご覧ください